

## 俳人羽鳥可良久を偲んで

長井公民館 新井五郎

江波の宝蔵院には菅公詩碑がある。裏面の上には、雲龍と特徴ある文字が、下には見事な撰文が書かれている。それは羽鳥可良久によるものだ。

可良久は善ヶ島名主又左衛門の三男政三郎として安永四年に生を受け、十二歳で江戸日本橋の酒問屋吉田屋に奉公に出された。主の吉田屋市右衛門は慈善家で著名であり、名高い文人墨客の出入り多く、政三郎は俳句に惹かれ、当時最も盛んな春秋庵加舎白雄に入門した。

蝶舞ふや 真砂に残る 波のあわ 可良久 十五歳

春の月 母の連舟 竿さして 可良久 十五歳

白雄死後、吉田屋にことわり関西を行脚、士郎より暁台の句集をいただく。

夏虫や 京には多き 仏堂 可良久

江戸に帰った可良久は秋香庵建部巢兆に入門、俳句道にひたすら精進した。

しかし、実家では兄が死亡、家を継ぐためにやむなく帰郷、妻を娶り名主役の修行の傍ら、句の道に精進した。

水仙の 香にさえ旅を せつかるる 可良久

文化四年念願の文台を師より許された。(四三歳) 文政二年には又左衛門を名乗り名主となる。吉田屋に変わり主家の御勝手賄役となり財政立直しに尽くし、苗字御免となる。

風流人墨客家人名録には加良久の名が見えるとのこと。天保六年には名主を養子文次郎に譲り隠居した可良久は、椎の木のそばに居を構え、椎雀亭の額を掲げ椎庵と号し俳句に専念、時には師を江戸より招いたこともあった。

(女沼にて)

五月雨や まくら借りたる 桑の奥 巢兆

はつかしの 煤の落ちたる 卯月かな 可良久

また、著名な鵬斎の椎雀亭記を欄間にかけて。南湖も椎の木の絵を描き賛迄記している。

聖天宮の裏手には芭蕉句碑があり、碑陰撰文には五渡より依頼された可良久が巢兆に頼んだという。可良久は弘化四年大往生。享年七三歳、墓は善ヶ島龍泉寺にある。



(熊谷市公連だより 第14号 平成24年より)